

『エドウィン・ドルードの謎』と『ムーンストーン』 ディケンズとコリンズの人種観

The Mystery of Edwin Drood and The Moonstone:

Race and Empire Represented by Dickens and Collins

宮川 和子

Kazuko MIYAGAWA

序

ディケンズはコリンズ (Wilkie Collins) の『ムーンストーン』(1868) を評して「構成は耐え難く、頑固に思い込みを通そうとする調子があり、読者を敵にまわしている」と書いた。一方、コリンズはそのお返しとして『エドウィン・ドルードの謎』(以下、『エドウィン・ドルード』)(1870)について「疲れきった頭で書かれた陰気な作品である」と嫌味たっぷりの「贅辞」を述べた！

両作品が執筆された 1860 年代後半に、親密だった 2 人の交友関係に亀裂が入ったが、理由の 1 つとしては、ディケンズがコリンズの弟を娘の結婚相手として迎え入れるのに乗り気ではなかったことが考えられる。こうした個人的事情のみならず 2 人のインド人観の違いに触れながら、両者が互いの作品に対して抱いた嫌悪が本物であったことは確かであるとニコラス・ランス (Nicholas Rance) は述べている？

エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は、「熱烈なヒンズー教徒の一団がイングランドで密かに殺人を遂行するというコリンズの探偵小説『ムーンストーン』の刊行に刺激を受け、ディケンズは翌年よく似たタイプの小説を書いてコリンズをしのいでやろうと思ったようだ」と述べ、2 人の競争心を指摘した？

「疲れきった頭で書かれた陰気な作品」という『エドウィン・ドルード』に関するコリンズのコメントについては、メキア (Jerome Meckier) は自己防衛のぎりぎりの試みとみなすべきだとしている！『エドウィン・ドルード』のジャスパー (John Jasper) は、ディケンズの生み出した究極の犯罪者であるが、『ムーンストーン』の二重人格者フランクリン (Franklin Blake) とエイブルホワイト

(Godfrey Ablewhite) の影をうすくさせることをねらって作り出されたものであるともメキアは論じている。§ コリNZは自分が『エドウィン・ドルード』の主な攻撃対象になっていると気づき、たとえ『エドウィン・ドルード』が完成していたとしても自分が負けることなどありえないと強がりを行ったのだとしている。

さらに、『エドウィン・ドルード』がメキアの言うコリNZへの「激しい競争心」を示しているだけでなく、帝国と人種の関係に対するコリNZのヴィジョンを、さらに保守的な結末へと向けて書き直そうというディケンズの欲望を明らかにしているとネイダー (Lillian Nayder) は述べている。§

本稿では、ディケンズとコリNZの人種観の相違に注目しながら、その人種観が各作品にどういう形で現れているかを考察したい。ジャスパーがフランクリンやエイブルホワイトに対抗意識を燃やして生み出された、より危険な二重人格者であるとすれば、その二重性は人種観の描写にどのような影響を与えうるであろうか。ネイダーの主張する『エドウィン・ドルード』が『ムーンストーン』よりも保守的なバージョンであるという読みを一貫して与えることを困難にするということはないだろうか。いくつかの例を検討しながら考察を深めたい。

1 インドの「大反乱」と両作家の反応

インドの「大反乱」(the Indian Mutiny, 1857-1858) に対するディケンズの反応は過激なものであった。友人に送った手紙には「最近起こった残虐行為のしみのついた『人種』を皆殺しにし」て「この世から抹殺する」という願望が書かれていた。§

他方、コリNZは“A Sermon for Sepoy”の中でインド人の教化にキリスト教的手段を用いることに疑問を呈し、インド人固有の「東洋の文学」から彼らがすばらしい道徳的教訓を学ぶことができようとして主張している。§ こうしたコリNZの考え方は瞠目に値する。サイド (Edward Said) によれば、代表的なオリエンタリストであるシャトーブリアン (Chateaubriand) はコーランを「文明の原理も人格を高めるための教訓も含んでいない」と決めつけ、「死んだ世界」である東洋を復活させることこそ「キリスト教徒の使命」であるとした。§ こうした東洋の文化を貶める偏見に影響されることなく、コリNZはインド独自の文化を尊重し、キリスト教の押し付けに反発しているのである。

こうしたコリNZの人種観が反映されている部分は『ムーンストーン』の中にも見つかる。たとえば、インド探検家のマースウェイト氏 (Mr Murthwait) は手品師に変装していた3人のインド人について次のように語っている。

“There is a mystery about their conduct that I can't explain. They have doubly sacrificed their caste – first, in crossing the sea; secondly, in disguising themselves

as jugglers. In the land they live in, that is a tremendous sacrifice to make. There must be some very serious motive at the bottom of it, and some justification of no ordinary kind to plead for them, in recovery of their caste, when they return to their own country.”¹⁰

自らのカーストを犠牲にしてイギリスへやって来て手品師に変装するという3人のバラモンの行いを“mystery”で「説明できない」としながらも、不可解な行為の奥底には“some very serious motive”があり、彼らなりのロジックに基づいて行動していると推理している。こうした推理は、「他者」の思考様式や文化を重んじているからこそ可能なものであり、コリンズが“A Sermon for Sepoy”で表明している主張に通じるものがある。

ただし、3人のインド人のカーストを犠牲にする行為の動機が、「インド人の偶像神の額にムーンストーンを戻す」ことであると知るや、“they care just as much about killing a man, as you care about emptying the ashes out of your pipe”(MS 130)と警告を与える。平気で人殺しをするインド人の恐ろしさを“the ferocity of tigers”(MS 129)に譬えており、こうした説明はインド人に対する偏見に満ちたものであるが、それはコリンズ自身に存在する差別意識にもつながるものがある。“A Sermon for Sepoy”の中でもインド人の反逆者を虎に譬えて偏見を露わにしていたが、「大反乱」におけるインド人の反逆に対して抱いた恐怖から生じたものであろう。

ここで、「大反乱」について少し触れておきたい。¹¹「大反乱」は1857年5月に勃発した。この年の1月、カルカッタ近郊に駐屯する部隊のスイパーヒー(インド兵)が、新しく配布されたライフル銃(エンフィールド銃という)の薬包の受取りを拒否した。薬包に牛と豚の油脂が塗られているという噂を聞いたのである。エンフィールド銃に薬包を装填するには、それを噛み破らねばならなかった。当時のベンガル軍にはバラモンやラージプートのような上位カーストの兵が多く、このスイパーヒーもバラモンだったから、牛の脂に触れるのは大問題であった。

スイパーヒーが薬包問題を彼らのカーストや宗教を失わせる陰謀だと受け取ったため、一旦広がった不安は容易には鎮まらず、北インド一帯に広がっていった。これが「大反乱」の前兆となった。インド人の文化や思考方法をもっと理解し尊重していたら、薬包には兵が自分で選んだ油脂を塗るような措置が最初からとられていたであろう。西洋的なものさしを押し付けるのではなく、インド人固有の文化を尊重したやり方でインド人を教育するべきであるというコリンズの主張は、こうした歴史的なコンテクストの中に置いても的を射たものであったのである。

上記の両作家の発言を比較するならば、ディケンズは過激な人種差別主義者であり、コリンズは寛容なヒューマニストであるという印象を受けるかもしれない。しかしながら、ディケンズの「皆殺しにする」という発言をそっくりそのまま彼の人種観とするのは、あまりにも短絡的すぎる。確かに、こうした「皆殺し」発言に近いような人種主義は『エドウィン・ドルード』の中にも描かれている。たとえば、オリエントの商品を取引で扱っているサブシー氏（Mr Sapsea）の発言がそうである。セイロンからやって来たネヴィル（Neville Landless）については“his complexion is ‘un-English’”¹²と述べ、さらに、“when Mr Sapsea has once declared anything to be un-English he considers that thing everlastingly sunk in the bottomless pit.”(ED 152)という語り手のコメントが続く。しかし、サブシーが妻の墓碑銘に“MR THOMAS SAPSEA”(ED 35)の文字を妻の名前以上に大きく刻み込み悦に入るといふ、愚かで滑稽なエゴイストとして描かれていることを考えれば、人種差別主義者が戯画的に単純化されて描かれていて、むしろ笑いものにされているようだ。このような人物を描くディケンズが100パーセント本気で「皆殺し」発言をしたとは考えられない。

このように『ムーンストーン』と『エドウィン・ドルード』をさらに検討するならば、2人の人種観がどのようなものかを探ることができるであろう。両作品を比較しながら、考察を深めたい。

2 『ムーンストーン』における二重人格と植民地支配の表象

メキアはとりわけ「人格の分裂」を問題としているが、『ムーンストーン』のフランクリンと『エドウィン・ドルード』のジャスパーでは「別人格」が無意識の中に存在するように描かれている。まずフランクリンの無意識が作品中でどのように扱われているかを考察し、そこに現れた人種観・植民地観も追求したい。

フランクリンは、密かに飲み物に混入されたアヘンの影響下、無意識状態でダイヤモンドを窃取する。これを証明するため、「昨年の犯行時」と同じ状態を作り出した上で、フランクリンにアヘン剤を与えるというエズラ・ジェニングズ（Ezra Jennings）の実験が行われる。フランクリンは無意識のままレイチェルの寝室へ入り、にせのダイヤモンドを盗み出す。その時フランクリンが無意識状態で口走った“*It was safe in the bank. [...] How do I know? [...] The Indians may be hidden in the house.*” (MS495) から、インド人によってダイヤモンドが盗まれるのではという心配がフランクリンの頭を占めているのがわかる。無意識でもレイチェルのダイヤモンドを気にかけて、それを守るために「窃取」したことが証明されフランクリンの行為は正当化される。

こうしたフランクリンの「窃盗」の正当化が、19世紀イギリスの帝国主義や植

民地制度における「搾取」の正当化と同じであることは、ヘラー（Tamar Heller）の指摘のとおりである。¹³ 自分の面倒を見ることができないから守ってやるという理由で、植民地の人々に対する管理・搾取を正当化するのである。

つまるところ、フランクリンが無意識下でも「紳士」として振舞っているように、「意識」と「無意識」の内容にほとんど差異がないことは、タンブリング（Jeremy Tambling）が指摘するとおりである。¹⁴ このように、主体の分裂した人間を描こうとして描ききれていないことが、イギリス社会の偽善性を暴く上での弱点となっていると思われる。

ここで、フランクリンからダイヤモンドを手に入れたエイブルホワイトにも触れておきたい。エイブルホワイトは3人のインド人に殺され、ダイヤモンドは真の所有者であるインド人の手に戻る。こうしたプロットだけを見れば、確かにコリンズはインド人にシンパシーを抱き、植民地を搾取するイギリスの制度を批判していると受け取られよう。しかし、エイブルホワイトは二重人格といっても、メキアの指摘するとおりその両面は協力的であり、遊蕩児としての快楽を隠すために公の場では慈善家として活躍している。このような二重人格は馬鹿げているしリアリティを欠く。¹⁵ そのためエイブルホワイトの描写を通してなされている制度批判も弱いものになってしまう。

3 『エドウィン・ドルード』のジャスパーの夢と帝国主義

それでは、フランクリンとエイブルホワイトに対抗して作られたジャスパーの主体の分裂はどのようなものであろうか。ジャスパーの、阿片の影響下で見る夢の内容から彼の無意識を探りたい。それはジャスパーの主体を脅かし暴れ狂うモンスターのようなものである。

ジャスパーの夢は作品冒頭にいきなり出現し、そのイメージは読む者を圧倒する。

An ancient English Cathedral Tower? How can the ancient English Cathedral tower be here! The well-known massive gray square town of its old Cathedral? How can that be here! There is no spike of rusty iron in the air, between the eye and it, from any point of the real prospect. What is the spike that intervenes, and who has set it up? Maybe it is set up by the Sultan's orders for the impaling of a horde of Turkish robbers, one by one. It is so, for cymbals clash, and the Sultan goes by to his palace in long procession. Ten thousand scimitars flash in the sunlight, and thrice ten thousand dancing-girls strew flowers. Then, follow white elephants caparisoned in countless gorgeous colours, and infinite in number and attendants. Still the Cathedral Tower rises in the background, where it cannot be, and still no writhing figure is on the grim spike. Stay! Is the spike so low a thing as the rusty spike on the top of a post of an old bedstead that has tumbled all awry?

Some vague period of drowsy laughter must be devoted to the consideration of this possibility. (ED 3)

夢の最初に出てくる“an ancient English Cathedral Town” “The well-known massive gray square tower of its old Cathedral”のイメージは、ジャスパーが聖歌隊長として活躍するクロイスタラムの町であり大聖堂の塔である。どちらも西洋の秩序や制度を表象しているが、西洋の秩序は帝国主義や植民地支配につながりフランクリンの無意識とうまく調和していた。しかし、ここでは疑問文が多用されていることで、ジャスパーが秩序や制度の存在を奇妙に思い、拒絶していることがわかる。

次に出現する“spike”は夢の中でどのような役割を果たしているのだろうか。“it is set up by the Sultan’s orders for the impaling of a horde of Turkish robbers”という表現から、“Sultan”の華麗で残酷で無制限の欲望が許容される世界へとつながる。ここには、西洋世界が偏見によって作り出した「オリент」のイメージが表れているが、「オリент」を欲望の対象として捉えるこの西洋的価値観とジャスパーの無意識は一体化している。ネイダーも、この部分がオリントの逸脱した快楽と危険という、お馴染みのステレオタイプを強化していると指摘している。¹⁶

しかし、“spike”がジャスパーの古いベッドの枠組みの一部でもあり、“town”や“tower”同様日常の秩序の世界につながっていることが、ジャスパーが覚醒するに従って明らかになる。¹⁷「トルコ人の盗賊を串刺しにする」はずの残酷な“spike”がサルタンの世界ではなく、実はジャスパーが聖歌隊長として活躍する昼間の世界につながっているということでもある。このことは、「逸脱した快楽と危険」を求める欲望が実は「オリント」ではなく、イギリス社会の側に属していることも暗示しているであろう。

このように、ジャスパーの夢は両義的であり、「オリント」の歪んだイメージを強化する一方で、イギリス社会の欲望と犯罪性も暴く作用をもっている。ジャスパーの人格の分裂が夢の中に見事に織り込まれているがゆえに、体制と一体化した帝国主義者のヴィジョンと同時に、体制を否定するアナキーな面という両極端な2つの面が描かれている。その結果、この夢の描写に関しては「コリンズの帝国観をさらに保守化したヴィジョン」が一貫して現れているとは考えにくくなるであろう。

4 アウトサイダー的人物の創造とオリエンタリズム

『エドウィン・ドルード』のジャスパーに東洋人の血が流れていることをディケンズが構想に入れていたとすればどうであろうか。¹⁸ こうした説は「犯罪と犯罪性を西洋から東洋へ置き換えるというディケンズの戦略を反映したもので

あるとネイダーは論じている。¹⁹ たとえば、ジャスパーがローザにしつこく求愛しているシーンは「東洋人の男の手にかかり脅かされたイギリス女性」のイメージを表しているのだと指摘している。こうしたネイダーの解釈は、ディケンズの人種意識を暴き立て批判するものであるが、他方イギリス社会の偽善性を攻撃するという、ディケンズが一貫して持ち続けたテーマへの考察が弱められてしまうおそれがある。

一方、メキアは、ジャスパーに東洋人の母親を与えるという説に次のように異を唱えている。²⁰ 『ムーンストーン』では、“whiteness”が疑わしいものとされ“darkness”がポジティブに扱われている傾向がある。こうしたコリンズの一見ナイーブな社会風刺への反撃として東洋人の血をもつジャスパーを作ったのだとすれば、聖歌隊長としてのジャスパーが「イギリス人」であり殺人者としてのジャスパーが「東洋人」ということになってしまう。これでは“whiteness”が悪くて“darkness”が良いという二項対立をひっくり返したにすぎなくなり、この説には欠陥があるとしている。

こうしたメキアの主張は、社会悪は社会の内部の奥深くから生じるというディケンズの考えに即したもので、聖歌隊長ジャスパーの暗黒面を主に精神的で社会的なものと定義するところから来ている。²¹ ジャスパーの肌が浅黒く“thick, lustrous, well-arranged black hair and whiskers”(ED 10)をもっているという記述から、フィリップ・コリンズ (Philip Collins) はジャスパーが東洋から来たという可能性を指摘しているが、²² メキアはジャスパーの東洋的な外見は「東洋の生まれ」を示すものではなく、抑制された「ヴァイオレントな性質」のサインであるとし、ジャスパーを「完全なイギリス人」²³ であると論じている。この説の弱点は、東洋の外見をヴァイオレンスと結びつける発想自体が人種の偏見を示していることを考慮に入れていないことである。イギリス人内部に潜む暗黒を表象するために「オリエント」の歪んだイメージが使われている点では、ネイダーが論ずるように『エドウィン・ドルード』にはディケンズの人種意識が潜んでいると言えよう。

ジャスパーには東洋的な外見の他にも際立った特性がいくつか付与されている。たとえばジャスパーが「女性的」であることは“Jack is always impulsive and hurried, and, I may say, almost womanish.”(ED 140)というエドウィンのコメントから窺える。さらに、阿片を常用している点がある。ジャスパーは自分の気持ちを偽って日々の任務を果すことに耐えられなくなり、逃避・自己解放の手段として阿片を服用している。ここで、ジャスパーが阿片窟で目にした光景、“the woman has opium-smoked herself into a strange likeness of the Chinaman”(ED 5)という描写を想起されたい。阿片窟の女が阿片を常用するうちに中国人の男に似てきたということであり、この部分についてはリン・ピケット (Lyn Pykett) が「阿

片窟の女パuffァが阿片を飲むことによってオリент化され、男性化されている」ことを指摘し、一方「ジャスパーは、受動性によって女性化し、阿片の常用と色黒で陰気な外見のせいでオリент化されている」と論じている。²⁴

オリент化した白人のモンスターという意味では、ジャスパーは『ムーンストーン』のエイブルホワイトの強化されたバージョンと言えるかもしれない。エイブルホワイトの二重性が暴露される最も印象に残る恐ろしい場面は、3人のインド人に殺された彼の衣装がカッフ部長刑事 (Sergeant Cuff) によってまさに取り去られようとするその時である。

He [Sergeant Cuff] traced with his finger a thin line of livid white, running backward from the dead man's forehead, between the swarthy complexion and the slightly-disturbed black hair. "Let's see what is under this," said the Sergeant, suddenly seizing the black hair, with a firm grip of his hand. (MS 520)

「黒い顔色」と「黒い髪」との間に走る「細い青白い線」が、犯人が実は東洋人に変装した白人であることを暴露している。「Let's see what is under this」というカッフの言葉は恐ろしい。その変装の下に隠れているものこそ、崇拝者の1人であるクラック嬢 (Miss Clack) から“our Christian Hero”(MS 275)と呼ばれていたエイブルホワイトその人の顔だからである。このシーンについてはヘラーが論じているように「色黒に変装したときにインド人に殺されたエイブルホワイトの死は、白人が原住民化 (“go native”) する際に生じる最もおぞましいイメージを表している」のである。²⁵

東洋的な風貌をもち「オリент」化したイギリス人、聖歌隊長にして殺人の疑いがあるジャスパーこそは、この色の黒い船員に変装したエイブルホワイトをさらに強化し恐ろしさを増した人物であるといえるだろう。メキアは、ジャスパーがインドの絞殺強盗団員 (a Thug) の儀式を模倣した方法で殺人を遂行し、エイブルホワイトよりもさらに巧妙に疑惑を「東洋」へ向けようとしたという仮説を立てている。²⁶ しかも、この絞殺強盗団 (Thugs) は「偽善者」であり「二重人格の歩くメタファ」とされていたことを利用して、ジャスパーの二重性を強調するのに使ったのだと論じている。²⁷ この仮説に従えばイギリス社会の偽善性を暴くというディケンズの意図は明らかになるが、そうした偽善性を描くために「東洋」の側の残酷で陰険なイメージを利用しているという点も見逃してはならない。

5 両義的人物ジェニングズと制度批判

ここで、『ムーンストーン』のジェニングズについても考察したい。ジェニングズの実験によって、フランクリンがダイヤモンドを盗んだにもかかわらず本人に記憶がないという不可解な状況に合理的な説明が与えられ、謎の解明を一

気に早めた。一方で、ジェニングズは、異様な風貌をもち男性であって「女性性」をもつという“strangeness”も付与されている。さらに、“I was born, and partly brought up, in one of our colonies. My father was an Englishman; but my mother- [. . .]” (MS 439) と言うようにイギリス人の父の血と植民地出身の母の血が流れている。これらの要素が、ジェニングズを通じて現れたコリンズの人種観を曖昧なものとしている。

「オリエント」の属性を与えられながら「合理性」と結び付けられるジェニングズはオリエンタリズムの固定観念を突き崩す作用をもつように思われる。²⁸ 一方で、「合理性」をイギリス人の血と、「異質さ」を植民地の血と結びつけるならばコリンズは人種主義者と解釈される危険が出てくる。こうした曖昧性はコリンズがインド人にシンパシーを抱きながらも、人種差別意識から完全に自由にはなれなかったという複雑な人種観から来るものであろう。

結び

本稿ではディケンズとコリンズの人種観を考察した。聖歌隊長ジャスパーは秩序転倒の方向へ向かい、合理性を切り崩す危険なものという属性を与えられ「オリエント」化したイギリス人として描かれていた。サイドは「オリエンタリストにとってのオリエントはあるがままのオリエントではなく、オリエント化されてきたオリエント」である、と言う。²⁹ それならば、「オリエント」のイメージとはそもそもヨーロッパの中にある腐敗・墮落が形を取って現れたものなのだと考えられるであろう。このように考えればジャスパーはイギリス社会の墮落の象徴であり、ジャスパーを通じてディケンズは社会批判をしているという解釈が成り立つ。一方で、社会のオリエント化を憂えるという発想は、根深い人種意識から発生したものということも忘れてはならない。

一方、ジェニングズの実験もまた植民地支配という歴史的コンテキストに置けば、両義的なものとなる。白人の「犯罪性」を暴いた一方で、ダイヤモンドを盗んだフランクリンが無罪放免になるという結末ゆえに、イギリス人の搾取も正当化するという解釈へと導かれる。

結局、2人の人種観は複雑であり、ディケンズが体制側の人間であり、コリンズは反体制であるという単純な二項対立では捉えられないものである。コンヴェンションを忌み嫌うコリンズが体制を擁護している部分が見つかり、ディケンズが秩序否定と取れるような描写をしているところもある。時代背景や個人の思想・想像力が、書くという行為の中であらまるとあって、複雑な人種観を形成したのであろうと考えられる。

注

本稿はテキスト研究会(2002年8月31日、於京都女子大学)において口頭発表した原稿を大幅に加筆・修正したものである。

- ¹ Nicholas Rance, “‘Wilkie! Have a Mission’: The Demise of Sensation Fiction,” in *Wilkie Collins and Other Sensation Novelists* (Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1991) 131.
- ² Rance, 131.
- ³ Edmund Wilson, “Dickens: The Two Scrooges” in *The Wound and the Bow: Seven Studies in Literature* (Athens: Ohio UP, 1947) 71.
- ⁴ Jerome Meckier, “Inimitability Regained: *The Mystery of Edwin Drood*” in *Hidden Rivalries in Victorian Fiction: Dickens, Realism, and Reevaluation* (Lexington: U of Kentucky P, 1987) 199.
- ⁵ Meckier, 153.
- ⁶ Lillian Nayder, “Crimes of the Empire, Contagion of the East: *The Moonstone* and *The Mystery of Edwin Drood*” in *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and Victorian Authorship* (Ithaca: Cornell UP, 2002) 165-166.
- ⁷ Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts, 4 October 1857, *The Heart of Charles Dickens*, ed. Edgar Johnson (New York: Duell, Sloan and Pearce, 1953) 350-351.
- ⁸ Wilkie Collins, “A Sermon for Sepoys” in Charles Dickens’s *Household Words: A Weekly Journal*, no.414, Saturday, February 27, 1858, 244-247.
- ⁹ Edward Said, *Orientalism* (New York: Vintage, 1979) 171-172.
- ¹⁰ Wilkie Collins, *The Moonstone* (Ontario: Broadview., 1999) 129. 以下、本書からの引用は括弧内に MS の記号とともにページ数を示す。
- ¹¹ 佐藤正哲 / 中里成章 / 水島司 『世界の歴史 14 - ムガル帝国から英領インドへ』 (東京: 中央公論社, 1998) 383-413. 本稿の「大反乱」の説明については、9章「大反乱」と植民地支配体制の再編」を参考にさせていただいた。
- ¹² Charles Dickens, *The Mystery of Edwin Drood* (London: Everyman, 1996) 152. 以下、本書からの引用は括弧内に ED の記号とともにページ数を示す。
- ¹³ Tamar Heller, “Blank Spaces: Ideological Tensions and the Detective Work of *The Moonstone*,” in *Dead Secrets: Wilkie Collins and the Female Gothic* (New Haven & London: Yale UP 1992) 146
- ¹⁴ Jeremy Tambling, “From *Jane Eyre* to Governor Eyre, or *Oliver Twist* to *Edwin Drood*,” in *Dickens, Violence and The Modern State: Dreams of the Scaffold* (Houndmills: Macmillan, 1995) 169.
- ¹⁵ Meckier, 160.
- ¹⁶ Nayder, 185.
- ¹⁷ “spike”については Lawrence Frank が、伝統的な拘束からの解放と反抗者への処罰という両義性をもつことを論じている。詳しくは、Lawrence Frank, “Dickens’s Urban Gothic: *Our Mutual Friend* and *The Mystery of Edwin Drood*” in *Charles Dickens and the Romantic Self*

(Lincoln and London: U of Nebraska P, 1984) 204-205.を参照されたい .

- ¹⁸ ジャスパーの片親を東洋人とする説については , Charles Forsythe, *The Decoding of Edwin Drood* (New York: Charles Scribner's Sons, 1980)と Felix Aylmer, *The Drood Case* (New York: Barnes and Noble, 1965)を参照されたい .
- ¹⁹ Nayder, 187-188.
- ²⁰ Meckier, 182.
- ²¹ Meckier, 183.
- ²² Philip Collins, "The Mysteries in *Edwin Drood*," in *Dickens and Crime* (New York: St. Martin's, 1994) 301.
- ²³ Meckier, 183.
- ²⁴ Lyn Pykett, *Charles Dickens* (Houndmills: Palgrave, 2002) 184.
- ²⁵ Heller, 163.
- ²⁶ Meckier, 184.
- ²⁷ Meckier., 184-185.
- ²⁸ Said, 40. オリエンタリストが偏見によって作り出した二項対立は , 「オリエント」が「不合理」「墮落」「子供っぽさ」「異質」であり , 「ヨーロッパ」が「合理性」「有徳」「成熟」「正常」であるとサイドは指摘している .
- ²⁹ Said, 104.